

(一) 現代文

【出題意図】

問題文は山崎正和『リズムの哲学ノート』（2018）「第一章 リズムはどこにあるか」に拠った。筆者はここでリズムを音楽論ではなくそれを感受する身体論の観点から説明し、さらにリズムを現象として捉えることで世阿彌の序破急の理論に接続させている。筆者独自のリズム論の展開をおさえ、内容を理解しているかどうかを中心に出題した。

【採点のポイント】

問一

正確な漢字の表記と読みを問う問題。

問二

筆者が考える理由も含め「リズムが共通語である」とはどういうことかを、傍線部以前の段落を踏まえて、適切にまとめられているかがポイントになる。

問三

リズムを感受する身体の分割できない全体性について、身体を「あらたに定義」する文脈として理解し、傍線部より後の具体例を用いて説明できているかどうか。

問四

傍線部より後に繰り返される「独立性」「完結性」という表現とその文脈に即して、リズムがひとまとまりの単位を形作ること、またそれぞれの単位の完結性をめざすことの二点を、適切な表現で説明できているかどうか。

問五

中国古典詩の知識を問う問題で、最小の4句（起承転結）からなる「絶句」と答えさせるもの（絶句は、古詩を唐代に近体詩の韻律にあてはめたもの）。8句からなる律詩と区別できるかがポイントとなる。

問六

世阿彌の「序破急」論がリズムの単位形成に関する文脈上に位置づけられていることを理解しているか。序破急のリズムの問題は能や演劇を超えて、自然一般や森羅万象にまで及ぶという世阿彌の主張をまとめられているか。

【講評】

問一

概ね8題（10題中）程度の正解率であった。

問二

主に直前の二つの段落を踏まえて解答する必要があるが、傍線部のあとに出てくる内容をまとめてしまっている人もいた。傍線部の前に、リズムの感受性は地域や歴史・文明が違ってても共有されること、リズムは個人のどの成長段階でも理解されることが語られていた。筆者は、リズムが言葉や文字によらないものであるがゆえに「共通語」になると考えている。以上の内容を60字程度で適切にまとめて解答できているかで評価した。

「どういうことか」と問うているのに対して、「～から」と応じている答案は減点とした。

問三

傍線部にある「リズムを感受するのは身体の全体」という言葉は、直後の二つの段落を読めば、身体を部分に分かつ身体観ではなく部位と部位とが融合するような全身的な感受がある身体を想定しているとわかる。このことを理解せずに、聴覚や視覚などの五感や身体部位を総合して全身で感受するという書き方をしているものは減点した。

「具体例を用いて」という指示があるにもかかわらず、楽器演奏や日本庭園の飛び石などの具体例が示されていないために減点対象となったものが目立った。また筆者の身体論をたずねる問題であるため、書道（文字のリズム）の例を用いるのはよいが、リズムの感受に「知識」も必要とされるという趣旨はここでは不要である。

問四

全体によく書けており、正答率は比較的高かった。「往復」という具体例は必須ではないが、「往」「復」の漢字を誤って引用した減点対象がやや目立った。

問五

教科としての国語を学習していれば解答できる知識問題で、概ね8割程度の正解率であった。

問六

筆者は世阿彌のリズム論を大きく二つの点で評価しているので、その両方を八〇字以内でまとめることが必要である。序破急のそれぞれが後の要素によって規定されているということから、作品における部分と全体の有機的結合や関係性についてのみ書いている答案や、序破急のリズムを演能の問題を超えて森羅万象に見いだすということだけを書いている答案は減点とした。また、世阿彌の主張を筆者がどう説明しているかを問うているので、世阿彌のことばをそのまま引用したのみの答案は減点とした。出題文の最終的なまとめの問題であるので、満点となったものは少なかったが、全体的外れな解答も多くはなかったので、受験生は本文の主旨を読み取っていた印象である。

(二) 古文

【出題意図】

室町時代、冷泉家流の武家歌人である今川了俊が著した『落書露頭』から出題した。とりあげたのは子を失った親の悲しみを詠んだ和歌を掲げる部分で、それぞれの詠作事情を記し、「心の深き」歌に言及している。和歌のことば自体と後続の文章にある詠作事情、解説とをあわせ考え、意味内容をよく理解することが求められる。「けり」「らむ」といった助動詞の意味・用法が生きた文法知識として身につけていることも、内容を的確に解釈する前提となるであろう。本文は『歌論歌学集成 十一』（三弥井書店）に拠り、表記を適宜改めた。なお、設問の都合上、語句を一部省略したところがある。

【採点のポイント】

問一

歌の傍線部の表現について、誰の、どのような心情をあらわしているか、の2点についての的確に答えているかが、ポイントである。

問二

「例」のように漢字と送り仮名で示すことを想定しているが、平仮名で記したものも正解とした。

問三

それぞれ①と②ともに合っている場合のみ正答とした。

問四

「とどめおきて」の歌に続く文章の歌意を説いた部分から趣旨を正確に読みとれているか、それぞれの「子」が誰を指すのかを明示しつつ叙述できているかが、ポイントである。

問五

「わが子への愛情は何にもまして深い」という趣旨がとらえられていればよい。答案に「別れ」の語を用いている場合、死別であることが明示されていないものは減点した。

問六

短歌は、三十一字という短い詩型のなかで、複雑微妙な考えや心情をよく表現できるといふ趣旨がとらえられているかが、ポイントである。和歌について言っているということが明示されていないものは減点した。

【講評】

問一

掲出部分の冒頭に和歌があり、後続の解説文の「この歌は…父公のよみたまひけるなり」の表すことを正確に把握したうえで答えることが必要である。採点ポイントの「誰の」については、大方が正解であったが、「どのような心情をあらわしているか」という点については、正解は意外に少なかった。これは、上述の詠作事情を十全に把握できていないことによる。

問二

Aは下接する逆接確定条件の「ども」から、Bは直前の係助詞「ぞ」の結びであることから正解できるはずで、ほぼできていた。なお問題文に「「侍り」の活用形が入ります」と指示してあるのにも関わらず「侍らむ」などと余分な助動詞が付いていて不正解としたもの、「侍」の偏が「彳」になっていて減点したものがそれぞれ複数あった。

問三

アの「まゐる」については、これがまだ「義孝(の少将)」が死んだと知らない「(東国の御庄の)代官」から「義孝」に宛てた「文(=手紙)」の中の謙譲語であることが読解できないとわからないだろう。実際に読んだのは「義孝」の「父(公)」だが、敬意はあくまで想定された読み手「義孝」に対するものである。正解率は6、7割程だった。

イ「たまひ」についてはこの「文」を「見」たのが直後の「父(公)」であるとわかれば、地の文の中であることから、「筆者」から「父(公)」に対する敬意であると容易にわかるだろう。正解率も高かった。

なお、問題文に「文中の地の文における呼称(筆者の場合は「筆者」)で」と答え方が指示されているのに、和歌の中の「(まだ)知らぬ人」や「文」の中の「少将殿」、「作者」「著者」(典拠の作者名である)「今川了俊」といった答えがあり減点した。問二でもそうだったが問題文はよく読むようにして欲しい。

問四

傍線部の後の「産みたる子をぞ…むすめの別れはかなしければ」に、(小式部内侍は)自分が産んだ子をより気の毒に悲しく思っているだろう。自分(和泉式部)も母との別れより娘との別れの方が悲しいのだから、という下の句の解釈が記されており、ここを踏まえて解答を導くことができる。さらには、この部分を手がかりに、傍線部(下の句)が「母と子をこの世に残して死んだ小式部内侍は誰(どちら)を気の毒に思って気にかけているだろう」という上の句の問に対する答となっていることを把握し、推量の「らむ」と過去の「けり」で小式部内侍の心情の推量とそう思う根拠を詠んだ和歌の表現を味わってほしい。前後の文脈を押さえずに、「まさる」を勝れているの意として和泉式部より娘の小式部内侍の方が勝れていると解釈するような誤答が目立った。

問五

正解率は高かった。普遍的な「ことわり」としては、「わが子への愛情は何にもまして深い」ことについてのものであるととらえるべきであろうが、子に先立たれた親の心情をとりあげる話題が続いている文脈であるので、「母との死別よりも子との死別のほうがより悲しい」などと具体的に記したのも可とした。ただし、小式部内侍の立場のみについて説明している答案は、減点した。

問六

完答もあり、8割程度得点した答案も少なくなかった。「ありがたき」が他にはないようなすばらしさをいう意であることも、大方とらえられていた。ここでは、短歌一般の表現力の豊かさをいっていると考えられ、和泉式部の和歌はすばらしいと、和泉式部の才能に主眼を置くものは、本旨からそれているとみられ、減点した。

(三) 漢文

【出題意図】

今年度は『顔氏家訓』からの出題。総字数約百三十余字で、ほぼ例年なみの長さの文章である。送り点・送り仮名を手がかりに内容を正しく読み取る力を備えているか、また、送り点の付け方や、基本的な語句の読みなど、漢文を読むための基礎的な学力が定着しているかを主眼に出題した。

【採点のポイント】

問一

基本的な語彙についての読み方を問う問題。A「もとより」という読みは、現代日本語では常用漢字表外の音訓で、多くはひらがな表記で使われる漢字であるが、文脈から類推して考えれば、正解できる問題である。B「猶」の「なほ」、C「便」の「すなはち」は、漢文においては頻度も高く、高校現場での教材では多く見かけられ、いずれも基礎的な学力を問う問題である。

Aは「もと」も正解とした。漢文は古典に含まれるので旧仮名遣いが望ましいが、新仮名遣いの答案も正解とした。

問二

書き下し文に従って送り点を正しく付けられるかをみる問題。送り点を付ける問題は、ほぼ毎年出題している。今回は、「須」の再読文字を入れたものとしたが、入門期の学習

が定着していれば、平易な問題であり、完答の場合のみ点を与えた。本学科受験を希望する者は、返り点の付け方ぐらいはしっかりと学習しておいてほしい。

問三

内容の読解ができているかを問う問題。まず、「不可自棄」の対象がなんであるかを捉えることが求められる。直前に「晩学」の語彙があり、それをきちんと押さえ、文脈を押さえれば正解できるはずである。誤字は減点、25字に満たない答案は0点とした。

【講評】

問一

おおむねよくできていたが、Aの「固」を、そのまま「かたし」、「かたく」と読むものがあり、また、「よりて」、「もって」、B「猶」は、「ただ」、「ゆえに」、C「便」は、「たちまち」、「すぐに」等、文脈の類推からであろうと考えられる誤答が多く見られた。基本語彙のため、きちんと勉強しておきたい。

問二

おおむねできていた。

問三

「不可自棄」を的確に理解できていない答案が多かった。「可」は「～できる」・「～してよい」等の意味を表す助辞、「自」はここでは「みづから」と読み、「自分から」・「進んで」という意味の副詞。どちらも漢文に頻出の語彙である。しっかりと勉強しておきたい。